

花と虫の記憶

入子

中央公論社

花と虫の記憶 一一〇〇円

一九七九年五月二十日初版印刷
一九七九年五月三十日初版発行

著者 大庭みな子

発行者 高梨 茂

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノハノ七

電話(五六一)五九二一

振替東京二二三四

©一九七九 検印廃止

花と虫の記憶

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

槇子は白いきれいな指を人形ぶりに三本そろえて、背後からその男の眼を覆い、もう片方の手で彼の凝視^{めいし}入^いっている大判の雑誌の表紙を静かに伏せました。

わたしは彼の斜め前の席に坐っていましたので、閉じられる頁がテーブルから垂直になった瞬間、それがヌードのカラー写真だったように思い、眼を伏せました。

ほんの一瞬、ひるがえったその頁に、淡い白色の女のからだがつと起きあがって、表紙の間に吸いこまれました。

それはほとんどグラビアに近いような単色ではあったのですが、ぬめって光る色がありました。蒼い夜の月色の女の裸身でした。

わたしは眼を伏せました。はだかの自分がみつめられていたように感じたからです。

そのとき、彼女もわたしのほうに気づきました。

「あら、あなた、来ていらしたのね」

彼女はわたしに近づいて来て、その男が坐っている席にしようかわたしの席にしようかと迷っ

たふうでしたが、彼をうながすように立ち上らせて、わたしのそばの椅子を引きました。

彼はいくらかくすぐつたい笑いを浮かべていましたが、気分を害されてはいませんでした。

彼は女のヌードの写真を見ていても、もう恥じない年頃でした。三十くらいでした。

彼はちっともはにかんではいませんでした。

「一、二杯いただいてから、上にまいりましょうか。予約の時間まで十分ばかりありますから。何になさる？」

「ぼくは、せっかくの御馳走をいただく胃を強いお酒で鈍らせたくありませんけれど」

彼の言い方は知ったかぶりに聞こえました。

「じゃあ、シェリーかなんか。——もつとも途中で座を変えるのも気分をそがれるから、そうねえ、いつてみましょうか、もう、上に。」

そしてゆっくりしたほうがいいかもしれないわね」

彼女は先に立って階段を登り始めました。

階上は暗いランプの光の中に、白いテーブルクロスと青い花がほとんどなじんで沈んでいました。

「これは、トルコ桔梗ですね」

彼は何によらず、もの知りの様子でした。

「女の方お二人とこうしているのはとても愉しいです」

そういう言い方も、外国映画かなにかにあるようでした。

「万喜さん、あなたはまた、今夜はトルコのお姫さまみたいにおきれいなね」

彼女はわたしの中近東風のデザインのブラウスを賞めました。

それは忠理^{ただまさ}がアンカラで買って来てくれたものでした。

中近東風だと言わず、彼女がトルコとはつきり指摘したことに、わたしは少しぎくりとしました。

「お二人とも、とても知識がおひろくていらっしゃるから、わたしはきっと、今晚は無口になるしかありません」

わたしは実際、二人が社交的で、お喋りそうなのにとほっとしていました。

お喋りな人と一緒にいるのは疲れなくてよいものです。熱心に聞いているふりさえすればいいんですから。

「この方、万喜さんておっしゃるの。」

あたくしは楨子^{むねこ}でしょう。同じ音ですわ、字は違いますけれど。この方のは万の喜びという字、いいお名前ね。

万喜さん、この方は、満農^{まんのう}祥三郎^{しょうざぶろう}さんとおっしゃってね、満つるという字に農と書くのよ、変ったお名前ね。亡くなった主人の仕事を長い間手伝って下さって、主人がとても頼りにしていた方ですの。自分の後継ぎにと思っていました、あの人は」

「ええ、玉名先生にはそれはよくしていただきました。

でも、あなたがいらっしやらなかつたら、あんなにしょっちゅう伺っていたかどうか」

満農祥三郎の口調は不遜でした。

「初めてお見えになった頃からもう十年ですわねえ」

慎子は彼の言葉を全然無視した調子で淡々と言いました。

「ええ、もう、それ以上です。ぼくが大学の三年のときですから二十^{はたち}でした。ぼくは早生れですから。

先生のゼミに入って、伺ったんです。

先生が生きていらっしやれば、〈時の人〉になっていらっしやいましたよ。トポロジイなどをやっていらっしやれば、ブラックホールの解説者かなんかでね。

でも、ぼくはもう数学なんかやめます。

大学に万年講師でいるのは飽きました。だから、アイリスに入れさえすれば喜んで、ロスにいきます。若いときに、ああいう暮し方があるのを一度知ってしまうと、日本よりは楽だということもあるし、それに、これからは企業のあり方だって、どんどん変わるんじゃないですか。

アイリスがロスに会社を作るのなら、是非創設期に現地勤務で入社したいんです」

わたしはアイリスという名が出たのでふたたびぎくりとしました。アイリス・カメラは越知忠^{ちか}理^{まさ}の会社です。

楨子が忠理とわたしのことを知っているとは思いませんでしたが、亡くなった母と忠理のことを知っていたかもしれません。それで、今夜、この満農祥三郎という青年をわたしに紹介するつもりになったのかとわたしは勘ぐりました。

「淳見さんの奥さまのお話では、淳見さんはとてもあなたを気に入っておいでの御様子よ」
そのとき、楨子が言いました。

「五年、あちらにいらして、経営工学と数理統計学でアメリカの学位を持っていらっしゃるのなら、現地で押しがきくし、日本の大学の学部が数学なのは、かえって異色でいいって。

それに、実際に会社が必要なのは人間関係での国際感覚みたいなものじゃないのかしら。

で、あなたも、決心なさったわけね、そちらが決まれば、いらっしゃる前に結婚なさったほうがいいって」

淳見——淳見実彦まねひこのことでしょうか、淳見実彦なら、越知忠理の義弟で、アイリス・カメラの副社長でした。

楨子の表情からは越知忠理を念頭に置いているかどうかは判断できませんでしたが、少なくとも、彼女が彼をアイリスに紹介したらしいのは淳見を通しての話のようでした。

ロス・アイリス社のことは忠理からちらと聞いたことがあるような気もしましたが、いずれにしても、わたしはこの話に今は何のかかわりもないふりをしていることに決めました。

祥三郎は、薄い笑いを浮かべて、タバコに火をつけました。嘲笑に似たその笑いは傲慢でした

が、どこか暗くて、妙なくぐもりがありました。それから、彼は巧妙にその笑いを人の好い、相手を誘い込むような、明るく邪氣のない、くずれたものに変えました。よく末っ子の男の子などが、何人もの年上の姉妹たちに気を配って育つ中で覚えたと思われる、例の、あの、甘えるような、巧みに他人の気を読む、人馴つこい笑いです。その笑いにはえくぼから八重歯まで完備していました。

いく分しもぶくれで、下唇がちゅつと突き出ているのが意地悪そうでしたし、笑わないときは腫れ臉なのにくっきりした二重の大きな眼の強すぎる光が、相手をまともに刺し貫き、威嚇するような感じを与えましたが、その笑いは、それらを逆転させる効果を持っていました。そして、彼はその効果を充分知っているようにも思えました。

「あなたのようなきれいなお嬢さんを目の前に置いて言うのは残念ですけど、ぼくは結婚する気はありませんよ。

でも、もちろん、あなたが結婚を考えないでぼくとつき合って下さるといふのなら、ぼくはあなたを女神くらいに崇めたっていいけれど」

祥三郎はわたしのほうに向き直って言いました。

「西欧的な表現をなさるんですね。思ってもいらいっしやらない大仰な形容詞をたくさんお使いになつて」

わたしは首をかしげて、いぶかるように、からかいました。

「どういうことでしょう。まるでぼくが不誠実だというような言い方をなさいますね。あなたこそ、ぼくを魅きつけることができると思っていらっしゃるみたいにお見受けしますよ。」

で、ぼくは、あなたがそう思っていらっしゃると、そうされないではいられなくなるたちらいんです」

彼はすばやく、しつぺ返しをしました。

「満農さん、主義をお変えになるわね、間もなく。その調子では」

槇子が口を挟みました。

「何の主義を？」

祥三郎は槇子のほうに向き直りました。

彼は何か言うたびに、話相手のほうにきちんと身をよじりました。

「独身主義をよ」

「それは、当分変わりません。」

ぼくは、貧乏ですから、女房子を養えないというのがその一番大きい理由です。アイリスの話なんて、あてにならないことだし、第一、そんなふうに腰の落ちつかない者を、大学がともに扱ってくれるわけがありませんよ」

「だって、あなた、いくら大学だって、もう専任の講師でいらっしゃるんでしょう。だったら、普通の生活はおできになるんですよ、アイリスの話はべつにだって」

「ぼくは、ただ食べるだけで、満足できるたちじゃないんです」

満農祥三郎はぴしゃりと言ひ、わたしをじつと見つめました。それこそ、そういう見つめ方が、必ず女の心をゆさぶると信じ込んでゐるふうでした。

「では満農さん、あなたにその氣がおりにならないなら、この方をどなたかいい方にお世話して頂戴。

この方のお母さまと、あたくしは女学校のときの同級生でしたの。ええ、とても仲のよいお友だちで、この方のお母さまは、それはよくできた方でした。

でも、三年ほど前お亡くなりになつて。

お父さまは、あなたも御存知かもしれませんが、有名な詩人で、評論家で、ほら、藤尾旦とおっしゃる方。

すてきな方よ」

「そうお思いなら、結婚なさればいいのに、おばさま。……父と。

そう思つていらつしゃらない癖に。母は不幸でしたもの」

「それは、あなたの独断よ、万喜さん」

礼儀正しく、たしなめる槇子に、わたしは更に言いました。

「ねえ、父は、母が生きているうちから、おばさまを誘惑したでしょう」

祥三郎はへええという顔で槇子の顔を見ていましたが、氣をとり直したように言いました。

「普通、男はみんな早く死ぬのに、早く死ぬ奥さんもいるんですね、きっと、あなたのお母さんは余程、殊勝な方だったんでしょね。でなければ、あなたのお父さんの生命力が並はずれておいでか」

「それだけお幸せだったということでしょう、お母さまが。それに、長く生きるのばかりが幸せというものでもありませんから」

楨子はなおもしつこく言いましたので、わたしはそれを払いのけました。

「母は父とめぐり逢わなければ、もっともっというんなものを生み出せた人でした」

「でも、そうしたくなかったんじゃないですか、あなたのお母さんは」

祥三郎はわかったような口の利き方をしました。

「ところで、ぼくは、結婚できないと言いましたけれど、女の人に関心がないと言ったわけじゃないよ。」

こういう方を御紹介下さって、それをみすみすとられそうな男に紹介するなんてわけにはいきませんね。

それに、ぼくのまわりにいる奴らは、少なくとも大学なんか……。

彼らは金が必要です。金持の娘か、働ける娘か、どちらかを選びますよ、結婚するんなら」

わたしがその何れでもないと断定した言い方に、楨子は鼻白んで黙りました。

彼の言い方はことごとくわざと女たちを挑撥しようといったところがありました。

「彼らは自分がやりたいことをやるためには、そうするか、でなければ、ぼくみたいにするしか仕方がないんです。

あなたの御主人だって、あなたと結婚なさったのは、あなたが医者という職業をお持ちで、働ける方だったからですよ。

でなければ、あんなにのんびりと、金にもならない数学なんてものを、大学で優雅にやってはいらっしゃらなかったでしょうよ。

御主人は見栄っぱりな方でしたからね。

なりふりかまわない、偏癡な学者という方ではありませんでしたから」

祥三郎が旧師を先生とは言わずに、榎子の夫を同性の男として批判する調子で言う言い方には、同時に異性である榎子に媚びるものがある、わたしを刺戟しました。

榎子は窓の外を眺めて、ひどく冷やかにその言葉を聞いていましたが、しばらくして、半ば、わたしに言いよかせるように言いました。

「率直に言って下さって、満農さん、あなたに感謝すべきかもしれませんわね」

そして、榎子は始めて、料理の皿に目をやり、スモークト・サーモンをフォークの上に乗せました。

おぼつかない左手のフォークの背に乗せたその朱色のぬれた肉を、榎子が唇に運ぶのを、祥三郎はうっとりとした目つきで眺めていました。

「動物のきれいな肉の色は、ぼくをぞくぞくさせるんです」

祥三郎は不躰に言い、榎子から目を反らしませんでした。

榎子はこういう祥三郎の言い方に馴れていて、それを愉しんでいるのでしょいか。

「あなたは、なんだって、左手でフォークをお持ちになるんです。左利きでもない癖に」

「そう教えられたからよ」

榎子はそつけなく言い、唇に葡萄酒を持って行きました。

「女の人の唇の間に、赤いお酒がたまっているのを見るのも好きです」

祥三郎は更に言いました。

「いったい、榎子はこういう祥三郎との対話をわたしに聞かせるためにわたしを招いたのでしょいか。」

もともと祥三郎のフォークうんぬんの言葉は、わたしの食べ方を見て言つたふしもありました。わたしは右手でフォークを持っていましたから。ナイフも右手で使い、切り終つてから、フォークに持ち変えて、右手で口に運びました。そうするほうが楽でしたし、今ではアメリカ式のマナーでそうする人が日本にも増えてきたからです。

父がそのやり方をわが家に持ち込みました。父はなんでも、時の流れに従つて動く人です。

母はそのやり方を嫌いました。テーブルマナーはヨーロッパ式でなければ我慢がならないといつた人でした。

「父は、わたしを一日も早く結婚させたがっていますけれど、わたしはどうでもいいんです」
わたしは槇子にともなく祥三郎にともなく言いました。

「だったら、ぼくとつき合って下さいよ。結婚するまで」

祥三郎は悪意をこめてにやりと笑いました。けれど八重歯とえくぼはそれに附随しました。
「とんだお見合ね。」

あなた方、若い方の考えていらっしゃることは、あたくしにはわかりませんよ」

槇子は料理に集中するふりをしましたが、ほんとうはわたしたちの話に好奇心を傾けていました。
た。

だからわたしは口を開きました。

「おばさまだって、そんなことは、ずっとむかしから、心の中ではそう思っていたことなのに。」

わたしたちが今しているようなことを、ずっとむかしから、そうすべきだと思っていたらした癖に」

槇子はオードブルの皿を押しやって、何か考えていました。

「そうですとも。」

あなたほどの方が、そうお考えにならないはずはなかったでしょうね。結婚なんかばかばかしいって。